立ち千両

30.0×12.0×12.0cm
2009年作
樹脂石膏・アクリル絵具・墨・胡粉
（台座ブロンズ）

瀬辺佳子の世界

金重陽子

「エッ　これ　ナニ!?」
「怖～」

一寸たじろぐも恐いもの見たさで中に入る　一点一点見ながら進むうち語りかけてくる立体はいつしか「もの」ではなくなり脈打ち 呼吸を始めている。

「嘆き」「悲しみ」「悩み」「悶絶し」「囁き」「はにかみ」「おどけ」「剽げ」「悦び」「踊り」始め 喋り乍ら 泣き乍ら 笑い乍ら 唄い乍ら ガヤガヤヒソヒソ みんな其々銘々思い思いに会場内を動き回る。

限りない動きの中から喜怒哀楽の姿を作家の鋭敏な感性は瞬時に掬い取り究極の身体表情に置き変える。

初めの拒絶反応は如何へやら摩訶不思議な瀬辺ワールドに感化され その虜となっている。

変化（へんげ）した人体は語りかけてくる 囚われてがんじがらめになっている人には心配しなくていいよ 楽にして生まれたままの姿でいいのよと。彼らが真っ直ぐ正直に何の衒いもなく生きている姿に思わず知らず共鳴共感し うん そうだそうだ と頷く。それは無意識のうちに築いてしまった心の中にある幾重もの壁を取り去り自由になるといいよと言っている。やがて、混沌として猥雑な中に光が射し込んで来るのが見えて来る。それが瀬辺佳子の世界ではないだろうか。

多勢が磁力に吸い寄せられるように引きつけられるのも厳しさの中に人に対する優しく温かい眼差しと飄逸さとを彼女が合わせ持っているからだろう。あるがままを包み込む懐の深さ 命を育む母性が根幹にあり 母性と云う酵母菌が、作家の土壌を耕し醗酵させ希有な世界を創り出しているのだと思う。